

約束の丘で

前編

文
D Ⅱ 零式

イラスト
十架

目次	――	三
第一部		
1 「別れ」	――	一五
2 「試練の始まり」	――	二八
第二部		
1 「倉田節子」	――	五〇
2 「工藤健太」	――	五九
3 「野島泰徳」	――	七七
あとがき	――	一〇六
奥付	――	一〇八
PDF化にあたり	――	一一〇

※この作品はフィクションです。実在する人物・団体・事件などとは一切関係ありません。

※この作品はF—LOOPの著作物です。個人で楽しむ以外で複製することを禁止します。

第一部

1 「別れ」

歓声が聞こえる。

紛れもなくステージ上のオレ達に向けられた歓声が。

喝采が聞こえる。

夢に向かって第一歩を踏み出したオレ達を祝福する喝采が。

そう、オレ達はやってみせた。

小さな町の外れにある伊隅学園の文化祭。

そのステージで「SEVEN+TRUTH」は、観客を魅了した。

もちろん、クラスメイトや知人の応援はあったにせよ、一般客が体育館から溢れる程に集まって、オレ達の演奏を聴いてくれた。

この拍手は、この歓声は、この熱気は――オレ達の正当な評価。

スポットライトを浴びながら、オレは全てが始まったことをヒシヒシと実感していた。

「みんなあ、あつりがと〜!!!」
興奮が冷めない観客に、ななこが明るい声をかけた。

ワァーっつと歓声が上がる。

オレ達はその声を背中に受けながらステージ袖へと下がっていく。
そこでも拍手が待ち受けていた。

裏方をしてくれていた文化祭の実行委員達が笑顔でオレ達を迎えてくれた。

「春原、やるじゃんか!」

「ななこの声、凄く良かったよ〜」

誉められて、ななこは照れくさそうに笑った。

普段の元気一杯な声とは違い、弱々しいとすら思えるほど繊細で、ガラスのよう
な響きのななこの歌声。

オレはそんなななこの歌声に惚れていたし、ななこはオレの作る曲に共感して
くれた。最初はそれだけで充分だった。オレ達には共通の目標——【夢】があっ
たから。

自分達の音楽を世界に響かせる。

その目標のために、オレ達は互いに協力し、歌を作ってきた。

そんな活動を通じて、オレ達は歌声でも曲でもなく、「お互いの事」を好きに

なつていったんだ。

「マコト、はい」

ななこはそう言つて、飲みかけのミネラルウォーターのボトルを差し出した。
ななこの額では玉の汗がキラキラと輝いている。

「サンキュ」

オレはボトルを受け取ると、口を付けた。

ステージに立っている間は気付かなかつたが、スポットライトを浴びながら演奏するのは、想像していたより汗をかくらしい。

冷たい水が喉をスルリと滑り落ちていく。

あつという間にボトルは空になってしまった。

ふうーと、息を吐く。

そんなオレをななこが笑顔で見つめていた。

「ん？」

「ううん、何でもないよ」

「そうか？ーならいいけど」

傍らのパイプ椅子にかけられていたスポーツタオルをとると、オレは顔を拭いた。

未だにステージの方からは歓声が聞こえてくる。

「ななこ、あと一曲くらいいけるか？」

「当然っ！！」

元氣よく、ななこは答えた。

軽く汗を拭うと、ななこは颯爽とステージに向かって歩き始める。オレはその後が続いてステージに上がった。

舞台袖で暗闇に慣れていた眼がスポットライトに幻惑される。

歓声が一段と大きくなったような気がして、オレは目を見開いた。

眩しいライトの向こう側。

暗闇の中で観客の熱い眼差しがオレ達に向けられている。

オレはおもむろにギターを構えると、ななこに視線を向けた。

「みんなありがとっ！この拍手にお答えて、あと一曲お届けしちやいますっ！

『Memories of Summer』

最初は優しく、丁寧な。

弦を爪弾いていく。

爽やかに。夏の風を想像しながら。

これから始まる夏を、精一杯駆け抜けていく為の助走を表現する。

〈吹き抜ける風 頬をなでて

となり、あなたの温もりを感じて

交わした唇は 約束の証

風の丘で 私達の物語が始まる〉

徐々に激しく。

そして、爆発させる。

〈見上げる空に 星が流れる

うれしさに零れる 涙にも似て

キラキラと 輝く夜空

二人の最初の思い出を

今 鮮やかに彩って〉

歓声にも負けず、スツと耳に入ってくる爽やかななこの歌声。

それに負けじと、オレの演奏もより繊細に、激しく。

キラキラと飛び散る汗が、ライトに反射している。

それはまるで焔めく星のように綺麗で、オレはふとなこに視線を向けた。

彼女の周りにも星がキラキラと反射して、彼女の笑顔を引き立てている。そんな彼女を見て、オレはななこが好きなんだって再認識した。

曲はもう最後。一端音が止まり、一瞬観客が息を飲む音が聞こえた。

そして、演奏が再開される。まるで夜空に打ち上げられた花火のように煌びやかに。

（見上げた空に 星が流れる

指さきに零れる 白い砂に似て

押し寄せる 波のざわめき

あなたの鼓動が 掻き消すよう

ギュッと 強く抱きしめて

その後にあるのは、静寂——夏が、終わる。

静かに、静かにギターが弦を震わせて。

アンコールが終わった。



後夜祭を抜け出したオレは、どこへ行くともなく歩いてきた。
気が付けばいつものように学園の裏にある丘に辿り着いていた。
心地よい潮風が通り抜けていくならかな。
街の喧噪などここには届かない。

聞こえてくるのは風の唄。

名前も無いこの丘でオレとななこは出会い、お互いの夢を知り、協力し、そして恋に落ちた。

オレ達の思い出の詰まったこの丘は、オレ達の宝物だった。

丘のてっぺんには桜の木がある。

潮風に緑色の葉がサワサワと揺れている。

その音に紛れて、微かに歌声が聞こえてきた。

儂いとさえ思える繊細なその声は、オレのよく知っている声。

「ななこ？」

問いかけに、歌声が止まった。

夕陽を浴びる桜の木のシルエツト。

その幹の部分にひよこつと影が突き出した。

「マコト？」

影の主はななこだった。

「なんだよ、ななこも来てたのか」

「まあ、なんとなくね」

そう言つて、ななこは桜の木に寄り掛かり、自分の隣の芝生をポンポンと叩いた。オレはななこの隣に腰を下ろして木に寄り掛かる。

「ライブ、とりあえず成功したな」

「うん、お疲れさま」

「まあ、なんだ。これからが大変なんだっていうのは解ってるんだけどさ。やっぱりみんながあれだけ盛り上がってくれると嬉しいもんだよ」

心地よい疲労感。

潮風が湿つた髪を弄つては逃げていくのに任せて、オレは静かに目を瞑つた。

「マコトも見える？」

ななこはそう言つてオレに寄り掛かってきた。オレはそつとななこの肩に手を回す。

「ん？」

「ライブの光景」

「ああ」

臉の裏にさつきまでのライブの光景がしっかりと焼き付いている。目一杯に輝くななこの姿もバッチリと。

「私ね、やっぱり歌うのが好きだっと思ってた」

「ああ。オレもそうだな」

今日のステージで実感した。

あの観客との一体感は麻薬に近いということ。

あの感覚を味わうためにもっと、演奏を巧くなって、もっと良い曲を作って、もっと大勢の人と一つになりたい。

だからプロを目指すんだ。

「オレは、オレの作った曲でみんなが盛り上がる光景をもっと見たいんだ」

「そっか」

ななこはそつと身体を起こした。

「それでーマコトはこれからどうするの？」

「これからってーSEVEN TRUTHとしてデビューするに決まってるだろ？」

「どうやって？」

「どうやってってー地道に路上ライブとか、あと、ライブハウス借りたりして

さ」

変なことばかり聞くなあと笑いながら、ななこの頭を小突く。

「それはいつから始めるの？」

「え？」

「すぐに始めなくちゃならないの？」

何を言ってるんだろう。ななこの言いたいことが良く解らない。

「すぐにつてーそりや、早くから始めた方がいいだろ？それだけ知名度が上がらだろうし。ほら、あのF e n r i r だつてそうやってトップまで上がったじゃないか」

そうだよ。国内外を問わず今や名前を知らない者はいないとすら言われている人気バンド「F e n r i r」。

過激なパフォーマンスとは裏腹に、繊細なテクニクと優しさすら感じる歌声はオレとななこの目標なんだ。

彼らと同じ道を歩いたからといって、彼らのようになれるとは限らないけど、地道な活動をするのは決して無駄にはならないはずだ。

だけど、ななこは悲しそうな表情を浮かべた。

「私だつて、マコトと一緒にユニットを続けたい」

続けたいーって、どういうことだよ。

「でもね、その前にやっておきたいことがあるの」

「ーなんだよ、やっておきたい事って」

「ななこはすくっと立ち上がった。オレもつられて立ち上がる。」

「私、ちゃんと歌を勉強したいの」

「風が彼女の髪を揺らす。」

「ちゃんとした発声を勉強することは、私達の武器になると思うの」

「でも、ヴォーカルトレーニングしながらでも、ライブ活動はできるだろ？」

「彼女は首を左右に振った。」

「私ー音大で声楽を勉強するわ」

「ちよつと、何言ってるんだよ？」

「音大って東京だろ？ここから五百キロは離れてるんだぜ？それに、声楽とヴォーカルじゃ発声の仕方が全然違うんじゃないか？」

「声楽を知っておく。クラシック音楽を知っておく。知識が多い方が、応用が利くでしょ？SEVENTH TRUTHがトップに出るには必要だと思うの」

「そりゃ、そうかもしれないけどー急すぎるぜ？」

「ー黙っててゴメン」

ななこはゆつくりと頭を下げた。

何か光る物が地面に落ちていった。

ななこが泣いている。

オレはどうして良いか解らずに立ち尽くした。

ななこの声がガラスのように儂いものなのはオレが一番知っている。ちゃんとした発声を学ぶことができれば、彼女の歌はより一層磨き上げられ、もっと多くの人の耳に届くに違いない。

だけど、オレも一時だって待つていられない。

あの麻葉のような快感を知ってしまったては黙って待つていることなんて出来やしないんだ。

「……ねえ」

不意にななこの震える声が聞こえた。我に返つてななこをみつめる。もう日も沈みシルエットしか見えないはずなのに、彼女の表情は手に取るように分かった。「どうして？」

彼女の顔が悲しさに歪む。

「どうして何も言ってくれないの？」

言葉に詰まる。ななこにとってそれが最良の判断だと思っけど、そう簡単に気

持ちの整理なんて付けられるはずがない。

戸惑うオレに、ななこは壊れてしまいそうなど弱々しく、悲痛な声をあげた。
「どうしてー どうして一緒に東京に来てくれるって言ってくれないの？」

「!？」

ななこはバツと振り返り、丘を駆け下りていく。

オレは彼女の背中に手を伸ばすが、脚は一步も動かさずに彼女を見送ることしかできなかった。

ー 夕闇の中、オレはただ静かに立ち尽くしていた。

後悔の念だけが、オレの頭の中をグルグルと回る。

オレは自分のことしか考えていなかった。

自分の計画通りにやっていくこと以外を思いつけなかった。

地道に知名度を広げるのはまず、地元から。そして名前が知られるのと同じスピードで徐々に東京に向かっていく。そうすれば、レコード会社もオレ達のことを放つては置かないだろうと。そんな考えで頭が一杯だったんだ。

ななこと一緒に東京に行くなんて、全然思いつかなかった。

あの夜以来、オレとななこはすれ違いを繰り返している。

あの丘に行っても彼女の姿はどこにもない。

授業が終わってななこのクラスに行っても、もうどこかへ行ってしまった後。

初めは電話をかけたりにしていたけど繋がらないし、電話で謝るのは違う気がしてやめた。

そうして、あつという間に季節は過ぎていった。

オレはななこに謝ることも、オレの意志を伝えることもままならないまま、卒業式を迎えている。

入場したときにななこの姿は確認している。あとはどうやってななこに話しかけようか。

何の仕事をしているのか知らない校長や、教育委員会のお偉いさん、来賓による祝辞が長々と続く。何を言っているのかなんて全く解らない。

ただ時が惜しい。

ななこにオレの意志を聞かせるのは、今日しかない。

今日を逃せば、オレとななこは離ればなれになってしまう。

「卒業生、起立」

司会の号令に立ち上がる。

「校歌斉唱」

校歌独特の軽快なピアノの伴奏が流れ、オレ達は歌い始める。大勢の歌声の中、オレの耳にははつきりとななこの声が聞こえた。

決して力強くはなかったし、合唱には似合わない「ヴォーカルの」な歌い方はなかったけれど、オレにはそれがななこの声だつて解つた。

この歌声に、この澄んだ優しい歌声に惚れたんだ。

そこからオレ達は始まったんだ。聞き間違えるはずがない。

だけど、オレとななこは——離ればなれになつてしまふんだ。

二人で過こした時間が頭の中を駆けめぐる。

気が付けばオレの眼からポロポロと涙がこぼれ落ちていた。

そつと涙を拭つて、オレは腰を下ろした。

式はただ何事もなく淡々と。

プログラム通りに進行して。

オレ達は順々に義務的な拍手を受けながら、体育館を後にする。

「SEVEN！ TRUTH、頑張つてっ！」

背中にかけられた声にハツと後ろを振り返る。

もちろん、誰がかけた言葉かなんて分かるはずがない。だけど、その言葉かと

でも嬉しくて、オレは笑顔で体育館を後にした。

そう、これで終わりなんかじゃないんだ。

オレとななはここから始まる。

SEVEN TRUTHの奏でた曲は、みんなの記憶に刻まれ始めているのだからー。

一端教室に戻ったオレは、部活の後輩達にもみくちやにされているクラスメイトをよそに、すぐさま、ななこの教室へと向かった。

涙を流す担任に花束を渡す女子と、それを見ながら盛り上がるクラスメイト達。その中に、ななこの姿はなかった。

「ごめん、田村さんいる？」

「あれ、春原君。ななこ探してるの？」

近場にいた女子に声をかけると、彼女はキョロキョロと教室を見回して、

「さっきまでいたんだけどなーみんな、ななこ知らない？」

クラスメイトに呼びかけてくれた。

「田村さんのカバン無いよ？」

「だそうよーまだ追いつけるんじゃない？」

「ああ、ありがとう」

オレは小さく頭を下げると、卒業証書を片手にその場を後にした。
まだ、ななこは東京に行つてはいないんだ。

まだ話せる。

オレの考えを話せる。

靴を履くのももどかしく、乱暴に脚を突つ込むと、オレは昇降口を飛び出した。
胸に付けたコサージュが外れたことを気にもとめず、オレは正門を左へ曲がる。

一本道。

ななこの姿は見えない。

違う。

ななこはまだ帰っちゃいない。

オレは正門を入ると、駐輪場へ向かつて走り出した。

ゴチャゴチャとまるでゴミ置き場のように押し込んで停められた自転車を右手
に、オレは裏門へと向かつて走る。

裏門から舗装路に出ずに防風林を抜けて。

目の前に広がる芝生の緑と空の青。

なだらかな丘の上には一本の桜の木。

潮風にヒラヒラと花びらが舞っている。

荒い息。

その呼吸の合間に、風に乗った歌声が聞こえてくる。
間違いない。

ななこの歌声だ。

オレはゆっくりと桜の木を目指して丘を登っていく。

歌声は次第に大きくハッキリと。

風の唄声と共に優しく優しく、オレの深いところに落ちていく。

「ーななこ」

呼びかけに、歌声が止まった。

芝生に座り桜の木によりかかったままで、ななこは大きく張り出した桜の枝を
見つめていた。

「やっぱりここにいたんだ」

オレはそう言いながらななこの隣に腰を下ろした。

久しぶりに感じるななこの温もり。

風に揺れる髪の毛の香り。

今まで当たり前前に感じていた彼女の全てが愛おしくて、また会えなくなつてし
まう事が切なくつて、オレは黙り込んでしまふ。

「―どうしてここに来たの」

ななこは桜の枝を見つめたままポツリと呟いた。

一杯言いたいことがあつたんだ。

だって半年もともに顔を合わせられなかったんだから。

だけど、その全てを一度に出そうとして、出口を塞いでしまっている。

言葉が出ない。

会えなかったからこそ言いたいことがあつた。

だけど、今オレはななこに会えた。

それだけで充分なんだよ。

「―会いたかったんだ」

正直な気持ちのスルリとこぼれ落ちる。

「ななこに会いたかったんだ」

まっすぐにななこを見つめて。オレはハッキリとそう告げた。

風が運んでくる若草の柔らかな香りが、オレ達を包んでいる。

ななこはゆっくりと表情を和ませた。

「不思議よね―最後にあって、マコトに会いたくなってどうしようもなくて」

キラキラの笑顔をおレに向けて。

「気が付いたら、この丘にいたの。ーそしたらマコトが来てくれた」
ゆっくりとオレの肩にもたれ掛かってくるななこの重みをしっかりと感じて。
草が風に揺れサラサラと心地よい音を立てて、波のように靡いている。
心が落ち着いていく。

「ーオレさ」

ななこの肩に手を回して、オレは一言ずつ言葉を紡いでいく。

「やっぱり、今すぐ東京へは行けないよ」

ギョツと固くなるななこの身体。それを優しく優しく抱きしめながら。

「SEVEN TRUTHがやってこられたのは、ななこの歌声があったから
なんだって思うんだ」

小さく「違うよ」って声が聞こえる。だけどオレは言葉を続ける。

「オレはななに甘えていたんだよ、きつと。だから自分の演奏への向上心が希
薄になっていったんだ」

そう。

ななこと一緒なら、きつと巧くいく。

ななこの声はみんなを魅了するものだから。

だから曲さえ作れば、あとはななが何とかしてくれるって。そう思っていた。

「自分の技術も無いまま、焦ってしまっただ」

「そんなことない、マコトの演奏は優しくて心地良い。私はそれが好きなの」

「ありがとう、ななこ。だけど、オレも技術をもっと磨かなきゃならない」

ななこの手がオレの服をギュッと握りしめる。

「オレはこの街から始めるよ。オレの演奏でみんなを魅了してみせる。だからななこは東京でやりたいことをしっかりとやるんだ」それがオレ達のためなんだ」フルフルと彼女の肩が震えているのが分かる。オレだつてななこと離ればなれになんかなりたくない。

だけど、こうするのが一番いい方法なんだって思う。

今、一緒にいればオレはななこに頼りっぱなしになつてしまふだろうし、それで足を引つ張ることになつてしまえば彼女のためにもならない。

「泣くなよななこ。――大丈夫、すぐに会いに行くよ」

ななこを抱きしめながら、オレは言葉を続ける。

「オレ頑張つて技術を磨きながら、東京へ行くよ。そしたらSEVEN TRU THの活動を始めようぜ」

「――約束して」

ななこはオレの胸に顔を埋めたままそう言った。

「ああ、約束する。すぐに会いに行くって約束するよ」
「うん」

ななこは笑顔でそう答えた。

傾きだした陽を背に。

オレ達は自然に口づけを交わしていた。

温もりがゆっくりと広がって、心に染み渡るように。

オレ達はこの丘で約束を交わした。

2 「試練の始まり」

あの約束から何日が経ったのだろう。

オレの技術は目に見えて上がることなく、ななこに会いに行きたい思いだけが大きく大きく膨らんでいった。

この街で始めるんだ、なんて格好いいこと言ってたわりに何て情けないんだろうオレは。ななこが東京で一人頑張っているっていうのに。

あらためて、オレはななこに頼っていたことに気付く。

ななこが側にいてくれたから、心に届く曲を作れた。

ななこが側にいてくれたから、あの歓声を聞くことができた。

今は――誰も振り向かない。

駅前で、繁華街で。

オレは弾き語りを続けた。

脇目も振らず通り過ぎていくサラリーマン。

クンクンと臭いを嗅ぎながらまとわりつく野良犬。

たまに子供が手を振ってくれてはいたが、それはオレの曲への評価と言うより、

珍しいものに対しての反応だった。

ななこに会いたい。

ななこに会いたい。

そんな気持ちから生まれた曲だけが、僅かに街行く人の足を止めた。数秒にも満たない僅かな時間、片手で足りる僅かな人を立ち止まらせた。

苛立ちは演奏にも影響を出し、次第に「激しい」ではなく「乱暴」になっていくオレの演奏に耳を傾けるものなど誰もいない。当たり前だ。そんなものはただのノイズ。街の喧噪と何も変わりはないのだ。

乱暴な演奏にギターの弦は悲鳴を上げ、片っ端から切れていく。
でも、弾かなきや。

弾かなきや巧くないんだ。

がむしやらにやればやる程演奏は乱れていく、無間のループに迷い込んでいるよう。

ああ、もう替えの弦が無いや。今夜はここまでだな。

オレは早々にギターをケースにしまい、そそくさと岬町駅前を後にした。

喧噪がだんだんと遠ざかっていく。

代わりに聞こえてくるはずの家庭の暖かな談笑は、この「夜の時間」にはほとんどない。街灯も次第に本数が少なくなり、静かな住宅地のどこか寂しい空気を際立たせる。

中央交差点を曲がれば行きつけの楽器屋『GROOVE』が見えてくる。スタジオ完備のこの店は毎日、深夜二時までバンドの予約で込み合っている。スタ

カランツ

店の扉に付けられたカウベルが軽い音を響かせる。

暖色系の照明と木目模様の壁がどこかの山小屋を想像させる店内には、ピカピカに磨かれたサックスやギターが陳列されている。

カウンターには見知った女性店員の姿。ファッション雑誌をパラパラと見ているその店員、小宮山美咲はこちらに気付いて笑顔を浮かべた。

「あら、春原君。いらつしやい」

「美咲さん、こんばんは」

美咲さんはオレが中学に入った頃にギターを教えてくれた人で、今は結婚してこの店のスタジオ予約管理を担当している。

「相変わらず暗い顔してるわねえ。弾けてるの？」

カウンターから身を乗り出して、オレの顔を覗き込んでくる美咲さんからオレは眼を逸らす。

「んーまさか、また弦切ったんじゃないでしょうね？」

ガシリとオレの頭を両手で固定して、ジロリと般若のような形相で見つめてくる美咲さん。

オレが何も答えられずにいると、ハアと溜息をついてオレの頭を解放してくれ
た。代わりにオレの左手をガシリと掴み、暫く黙った後、ゆっくりと口を開いた。

「あんたさ、今月入って何回目よ？金が無いくせにバンバンバン切つて。それ
だけ練習してるなら仕方ないけど、切れるほど練習してる手には見えないわ」

呆れたようにそう言われて、オレは返す言葉がなかった。彼女の言うとおりで
から。

とにかくやることなすこと全てが悪い方向へ行ってしまう。何とかしたいけど、
何をすればいいかわからない。

苛立ちが募る。

演奏が荒くなる。

このループから抜け出す道を見付けられない。

「時間ーあるわよね？」

「え？」

「じ・か・ん・ー この後、スタジオが三十分くらい空いてるのよ。久しぶりにあなたの演奏聞かせてくれない？」

「ーだけど」

「さっさと弦を張り替えてスタジオに来なさい、いいわねっ！」

返答に詰まるオレに、美咲さんは奥の棚から弦のセットを投げてよこした。

スタジオに入って弦を手早く張り替えていると、美咲さんが四歳になる息子のたける君を連れてやって来た。ちよつと眠そうに美咲さんのスカートに掴まっている。

「調音は済んだ？」

美咲さんはたける君を抱き上げて、椅子に腰掛けた。

「すぐにやりますよ」

オレは手早く調音を済ませます。

スタジオにオレのギターの音色が綺麗に響く。

なんだよ、普通に弾けるじゃないか。

「準備ができたなら、適当に一曲頼むわ」

「はい、わかりました」

さて、何の曲を弾こうか。

久しぶりに美咲さんに演奏を聴かせることになったんだ。そういう意味では一番慣れ親しんだ曲を聴いて貰うのが良いかも知れない。だったらアレしかないな。オレはおもむろにギターを構えて軽快に弾き始めた。

――『MAGIC』。美咲さんが作って聴かせてくれた曲。ギターを始めたばかりのオレがいつも練習した曲だ。

演奏に合わせて、美咲さんが歌い始める。

〈何でもないよって 笑顔で言うけど

一人の教室 泣いているあなた

昨日のケンカかな それともそれとも……

話してくれなきゃ わからないじゃない〉

歌いながら、美咲さんはちよくちよくオレの方に顔を向ける。歌声はあの頃のようにノビノビとしているが、どことなく歌いにくそうな、眉を寄せるような仕草が気にかかる。

「私じゃダメなのかな？

あなたの力になれないのかな？

そんなはず無いよね

ねえ、そうだと行って

あなたの笑顔が好きだから

とっっておきの魔法をかけてあげる

あなたの元気になりたいの

ほっぺに熱いKissのMAGIC

悩み事なんて忘れてね？

私のことを見つけてね☆

一コーラスを歌いきったところで、美咲さんが両手をパンパンと二回叩いて演奏を停めた。彼女の腕の中には何故か泣きじゃくるたける君の姿がある。

「ちよつとちよつと、酷いんじゃないの？」

「えっとー」

何を言っているのか良く解らず、ポカンとしていると美咲さんがたける君をあやしなながらオレの前に立ちはだかった。

「たけるが泣いちやったじゃないの。この歌そんな泣かせる歌じゃないわよね？」
「いやーオレはただ」

「ただー何よ？音を外しませんでした？ミスをしませんでした？ーあんたの
目指すところはそんなものじゃないでしょ？」

美咲さんは呆れたようにハアツと溜息をもらしてから、オレの目をジツと見つめた。

「あんたは何のために演奏しているの？自分の曲を世界中に響かせるためとかで
つかい事言つてたくせに、全然その気持ちが出てないのよ。ただただ必死なだけ
子供が泣くのも仕方ないわ。必死すぎて演奏が恐いんだもん」

あ。

そうだったのか。

オレは巧くなることばかり焦つてしまつて、また大事なことを忘れていたんだ。
音を楽しむ。

音楽とはそうあるべきなんだ。

急に、目の前が明るくなつた気がする。

それが表情にも現れたのか、美咲さんはオレを見て笑顔を浮かべた。

「よし、まあ今後がんばんなさい。有名になつたらウチの店、宣伝してよね」

肩をポンポンと強めに叩く美咲さんの手は、とても温かかった。

× × ×

GROOVEを後にしたオレは久々にあの丘に来ていた。

星明かりの下で大の字になって空を見上げる。

オレが今伝えたいこと。

オレが今伝えられること。

「ななこに対する想い、だよな。」

この想いをななこに伝えたい。

そう思った瞬間、頭の中にメロディーが浮かんでくる。

無尽蔵に曲のイメージが溢れてくる。

とにかく書いてもたつてもいられなくなり、オレは必死に頭の中に浮かんでくる

ものを書き留めていった。

× × ×

東京行き夜行バス乗り場からななこに電話をかける。

ななこは講義やレッススが忙しいらしく、なかなか時間が取れないので、できる限りこちらから電話をしないようにしてきた。

でも、今回は会いに行くんだ。直接顔を見て話をするんだ。

『もしもし、マコト？』

何度目かのコール音の後に若干ノイズの混じったななこの声。それを聞くだけでオレは顔が綻んでしまう。

「ああ、久しぶり。元気か？」

『うん、まあまあ。ー どうしたの、マコトが電話してくるなんて珍しい』

「今からさ、東京に行くよ」

『ーえ？』

電話の向こうでななこが目を丸くする様子が想像できた。

「いやいや、まだ技術とかは大したことないんだ。ただ、新しくできた曲を聴いて欲しくってさ」

ななこを想って作った曲を聴いて欲しい。いくら良い曲ができて聴いてくれる人がいなければ何の価値もないのだから。

『あゝ、びつくりした。そっか、曲結構作ってるんだ？』

「まあねー明日の朝にはそっちに着くけど、時間空けられるか？」

『ん。夕方からなら何とかできる』

「OK、じゃ明日」

『バイバイ』

久々に聞いたななこの声は、心なしか疲れているようで、それを無理に明るくしているような感じがした。

オレはななこに会えばきつとまた頑張れる

ななこはどうだろう。

オレにあつたら、元氣を出してくれるのだろうか。

それとも、今はただ迷惑なだけ？

考えていても始まらない。

オレは到着したバスに乗り込むと、固い座席に深く座り、考えを振り払うように無理矢理に目を閉じた。

新宿の喧噪の中、オレはななこを待っていた。
通り過ぎる車。

ザワザワと行き交う人々。

見上げた空は狭く、灰色に濁り。

ここでは風の唄は聞こえない。

オレの内側に満ちている丘の風と、ななこの声が霞んでいく。

もうすぐ会える。なのに、一向に進まない時間。じれったさがオレをイライラさせる。このままじゃダメだ。

音を奏でなきや、ダメだ。

風の唄を。

オレの歌を。

あの丘の歌を。

ななこへの想いを。

オレはギターを取り出すと道ばたに座り込み、静かに弦を爪弾き始めた。

ビルの隙間から吹き込んでくる風は唸り、オレのギターが生み出す微風を蹴散らしていく。

それはまるで、成果の上がないオレの技術をあざ笑うかのように、容赦なく掻き消された歌声は街行く人に届くはずもなく、ただ「ギターを弾いているよな人がいる」のと何もかわらない。

ななこはこんな街で、自分を磨いているんだ。
なのにオレは――。

「マ〜コ〜トオ〜!!」

風に乗って、あの声が聞こえてきた。

強風に打ち負かされることなくハッキリと聞こえたその声。
以前に比べて力強く、より繊細になったなこの声だ。

辺りを見回す。

人。

人――人。

人――人――人――人。

道の向こう側。

人混みの塊の上からこちらに手を振る誰かの姿。

「―――― ななこ」

オレはフラリと立ち上がった。

か。
どうして、彼女の声はこんなにも心地よく、オレを勇気づけてくれるのだろうか。

愛しくて。

嬉しくて。

オレはフラフラとななこの元へと足を向ける。

今はただ、ななこの声しか聞こえない。

今はただ、ななこの姿しか目に入らない。

早く、その身体をギュッと抱きしめたい。温もりを感じたい。

歩みは徐々に早くなり、オレは人混みをかき分けていく。

「ななこっ！」

手を振りながら、オレはななこの名を呼ぶ。

突然、目の前の人混みが途切れ、道の向こうにななこの姿がハッキリと見えた。

オレは一目散に駆けだした。

「ちよっ、マコト!？」

目を丸くして驚いているななこの表情。

そんなにビックリするなよ、久しぶりに会ったからってさ。

オレは笑顔で、ななこの元へと駆け寄っていく。

「マコト、危ないっ!!!!!!」
ナナコの悲鳴に似た叫び声。

それが聞こえるのとほぼ同時に、オレの視界は光に包まれた。

キキキキキキイイイイッ!!!!!!

脳味噌を掻きむしるような嫌な音と共に、目も眩むような衝撃が全身を襲う。

一瞬、身体が浮遊している感覚がした。

「マコトおっ!!!!!!!!!!」

薄れ行く意識の中で、ななこの声だけがハッキリと聞こえた。

× × ×

気が付けば、白い部屋にいた。

目の前には目を閉じたオレが鼻や腕に管を付けられて寝ている姿がある。傍らには心配そうに寝ているオレを見つめるななこがいた。

「ななこ、オレはこっちだよ」

近寄って、ナナコにそう告げる。

だけど、ななこはオレを見ない。オレではなく、「寝ているオレ」を見ている。悲しそうな顔で何の反応も示さない。「寝ているオレ」を見ている。

何が起こってるんだ？

オレにはちゃんと手も足もあるのに。なんでオレを見てくれないんだ。周りを見渡す。

消毒液の臭いがする空気。

恐らく病院の一室だろう。

扉近くには洗面台と鏡があつて「……………」。

「な!?!」

オレは自分の目を疑った。

鏡にオレの姿が映っていない。

どうして？

オレはここにいるのに。

何がどうなってるんだ？

『貴様はハルハラマコトの肉体から抜け出したハルハラマコトの魂だ』

どこからともなく声が聞こえた。

「だ、誰だ!?!」

怯えながら問いつめるオレの目の前に、黒い霧のようなものが浮かび上がり、次第に人の形を作り出す。

それはやがて黒いマントに身を包んだ長身の人影になった。マントから覗く黒い手には刃渡り一メートルほどの巨大な鎌が握られている。

それは絵本で見た死神によく似た姿をしていた。

「し、死神……」

『死神かーまあ、貴様等人間から見ればそういう存在になるかも知れない』

死神は黒いフードの奥の白い仮面の下でクツクツクツと気味の悪い笑い声を上げる。

背筋が凍るような感覚を受け、オレは後ずさりした。

『死をもらす者に恐怖を感じるのは当然の反応だ。だが、怖がる必要はない』

怖がる必要はないと言いながらも、死神は手に持った鎌をゆっくりと左右に振りながら近づいてくる。

そしてその鎌の先端をオレの首元ではなく、「オレ」と「ベッドに横になってあるオレ」を繋いでいる細い細い糸のようなものに引っかけた。

内蔵を抉られるような気持ちの悪さを感じてオレはその場に膝を落とす。

『コイツを切れば貴様は死ぬ。がー貴様の死期はもう少し先だ』

死神はゆつくりと糸から鎌を外して肩に担ぎ、再びクックックと笑った。

『さて、面白いことになった』

死神はオレの顔を覗き込みながら、仮面の隙間から覗く濁った目を細めた。

『車道に飛び出した貴様は車に撥ねられ、ここに運ばれた』

死神はベッドに横になるオレを指さしてそう告げる。

車に撥ねられた？

オレが？

ななこに会いに来ただけなのになんで？

『その事故でどういうわけか、貴様は肉体ではなく魂に傷を負ってしまった』

「魂？何言ってるんだよ」

『魂とは【想い】という無限のエネルギーを内包する風船のようなものだ。それが傷つくとは……クッククククー実に面白い人間だ。お前のような人間にこの鎌を突き立ててみたいものだよ、クッククク』

濁った目が爛々と輝いてオレを見つめている。

『まあ、それはいつかの楽しみにとっておくとして。――今のままではお前はすぐに死んでしまう』

「死ぬって――さっきはまだ死なないって……」

『今は一瞬。こうして話している間にも貴様の死期は近づいているのだ、クッククク』

暫く嫌な笑いを続けていた死神はオレを正面から見据えた。

『魂に傷があると、いくら内包されるエネルギーを増やしても増える端からこぼれ落ちてしまう。穴の空いた風船を膨らませられないのと同じだ』

「じゃ、じゃあ、どうしたらいいんですか？」

『簡単なことだ。他の魂によってその傷を補修すればいい』

「それって、他の人を殺せっていうんですか？」

オレは思わず声を荒げた。

冗談じゃない。人を殺すなんてできないはずがないじゃないか。

だが死神は再びクッククックと笑った。

『殺すーか。まあ捉え方によればそうだろう。だが、寿命が来た人間から魂というエネルギーを頂戴するのは殺人なのか？』

言っていることが理解できず、オレは口ごもる。

寿命が来たかどうかはわからないし、魂を得るためにはやっぱり殺さなきゃならないんじゃないだろうか。



『死期はオレが教えてやる。貴様はそれを対象者に告げ、その者が天寿を全うするその瞬間を見届ければ良い。――貴様が手を下すことは何も無い。それとも――』

死神は一瞬、ななこの方を見つめた。

『この世に未練がないと言うのなら、この場で貴様の命を頂戴する。いくら魂が傷つく面白い人間だからといって、生きたくもない人間の魂の補修をするなど無駄なことだからな』

言われて、オレもななこを見つめた。

未練がないはずじゃないか。

オレはななこに聴かせたい曲ができたから会いに来たんだ。

ななこにオレの想いを聴かせたいから、出てきたんだ。

なのに、死ぬなんてできるはずじゃないか。

オレは、ジツとななこを見つめる。

今にも泣き出しそうなななこを今すぐ抱きしめてやりたい。

「――魂を修復したら、オレは今まで通りに戻れるんだな？」

『ああ。貴様の傷は五つ。五つの魂を集めれば、貴様は肉体に戻り再び呼吸を取り戻せる』

「わかった。やるよ」

『よかろう。ーでは我と契約せよ』

「契約って、そんな話聞いてないぞ」

『ふむ、困った。契約せねば貴様は肉体から自由に離れることができないのだ
が？』

それはつまり魂を取りに行けないって事か？

『どうする？』

どうするって、そんなこと言われたら契約するしかないじゃないか。

オレは渋々領いた。

「わかった、契約する」

『ではハルハラマコト。契約の証として貴様に我が力の一部を貸し与えてやる』

そう言っつて、死神はオレに向かって鎌をかざした。

きらりと光った鎌の刃を見た瞬間オレの意識はゆっくりと沈んでいく。

『一人目はー』

死神の声の頭の中に僅かに聞こえていたー。

第二部

1 「倉田節子」

静かな波音が聞こえてくる岬に立てられた別荘。その二階にオレはふわりと舞い降りた。

優しい風が吹き込んでくる僅かに開けられたままの窓枠や床板のくたびれ具合が、この別荘の年期を物語っている。

月明かりに照らされ、白い清潔そうなカーテンが揺らめく窓の下。

木製のベッドに横になり、静かに胸を上下させる老婦人の姿があつた。彼女はオレの気配に気付いたのか、ゆっくりとオレの方を見る。

死神によって頭の中に送り込まれたデータによれば、彼女の名前は「倉田節子」という。彼女は今日、七十二年の生涯を終えることになるのだ。そしてオレは彼女を看取らなくてはならない。

「おやおや、お迎えが来ましたねえ」

手足が細く腰が弱くなり、ろくに歩けなくなつた今でも、彼女の髪はしっかりと

と整えられていた。ゆつくりとした口調ながら、張りのある声もどこことなく気品を感じさせる。

「もう思い残すことはないですか？」

オレの問いかけに、彼女は優雅に口に手を当てフフフと微笑んだ。

「そうだねえ。七十年も生きていれば、大抵のことはしてしまつたしねえ」

彼女はゆつくりと窓の向こうに視線を向ける。どことなく「あの丘」を思い出させる緑の岬には、大きなクスノキが一本、大空に向かって大きく枝を伸ばしていた。

「あなたが、二週間前に現れた時はビックリしましたよ。『二週間後に死ぬぞ』なんていうんですものーでもそのおかげで、最後の日々を最愛の家族と過ごすことができました」

彼女は嬉しそうに微笑んだ。

この別荘には彼女と、彼女の息子夫婦。そして可愛らしい孫が三人、一週間滞在していた。

二週間前にちらつと様子を見たときは、息子は仕事を休むことに抵抗を感じていたようだが、どうやら、母親の「最期の願い」ということを悟つたのだろう。

一週間前から家族みんなでこの別荘に来て、彼女と共に過ごしていた。

「若い死神さんは知っていますか？あのクスノキのこと」

「ーいいえ」

「私のはあのクスノキみたいになりました。ークスノキをはじめ常緑樹は皆、新芽が出るまで枯れ葉を散らさないんですよ」

「はあ」

「新しい命がしっかりと自立することを見届けてから散っていく。親は子供の成長をしっかりと見届けてから死んでいくの」

彼女は最後に話し相手を見付けたかのように、どことなく楽しそうに言葉を続ける。

「私の両親は戦争で私を庇って亡くなってしまったわ。私には子供を庇って命を投げ出すような度胸はきつと無い。ー今でも、ね。」

だからせめて、子供が独り立ちするまで見守ってあげたいって思ってた。生きてきた。気付けば肌はクスノキの幹のよう。でもね、おかげで可愛い孫達の顔まで見ることができたわ」

オレはそれを黙って聞いている。

聞いていることがわかっているからか、彼女は満足そうにゆっくりと目を閉じる。

「最愛のあの人と出会ったこの別荘で、愛する私の家族に囲まれて最後の時を迎えられる私は、きつと幸せ者なのでしょね」

彼女は本当に嬉しそうに、顔を綻はせる。そんな彼女にオレは冷酷な言葉をかけなければならぬ。

ともすれば、胃の中身が逆流してしまふような気持ちの悪さを感じながら、オレは小さくその言葉を口にした。

「ーそろそろ時間です」

「ええ。ありがとう、若い死神さんーこれで、あの人に会いに行けるわ」

彼女はそう微笑んで、ゆっくりと力を抜いていった。

オレの体の中で時計の針がカチカチと動いている。

あと十秒足らずで「倉田節子」は息を引き取る。

彼女の中に満ちていた魂というエネルギーが身体から溶けだし、彼女の胸の上に球体として凝縮していく。

暖かい中に、チクチクとした痛みを感じるそれはキラキラと煌めいていた。

これが、オレの魂を修復するエネルギーとなるのだ。

罪悪感が無い訳じゃない。

だけど、彼女は安らかに穏やかに息を引き取っていった。

それがオレには救いだった。

「ーお休みなさい」

魂が完全に抜けだしたのを確認したオレは、冷たくなっていく「倉田節子」に手を合わせた。

ふいに、部屋の向こうに人の気配が近づいてきた。

「お婆さん？どうしたの？」

いいながら扉を開けて孫娘「確か「みさと」と呼ばれていた娘が入ってきた。みさととは辺りをキョロキョロして、眉をひそめた。

「お婆さん、誰かとお話ししてなかった？」

みさととはオレに気付かず窓へと向かって歩みを進めた。みさとには死神の力を得ているオレを見ることはできなかった。

「窓開けっ放しじゃ風邪ひいちゃうよ？」

いいながら窓枠に手を伸ばし、不意に動きを止めた。不思議そうに「倉田節子」の顔を見つめる。

「お婆あちゃん？」

返事はない。それはオレが一番良く解っている。

「倉田節子」は六月五日午後八時三十二分十五秒に「ー死んだのだ。



「え、なに？」

みさとは暫く呆然と倉田節子を見つめていたが、急にはっとして部屋を飛び出していった。

すぐに階段を駆け上がってくる数名の足音が聞こえてくる。

オレはその隙に、窓から外へと抜け出した。

後ろからは、恐らく息子夫婦のものであるう嗚咽が聞こえてくる。

オレは「ー」人の悲しみを積み上げて、想いを遂げようとしている。

だから人の悲しみを背負わなくてはならない。

ななこに想いを伝えるために。オレがもう一度ななこに触れるために。

「ー」ああ、月が綺麗だ。

こぼれた涙が、空に煌めいた。

次の日。

オレは病室で自分を見下ろしていた。

血色は良いものの、目を覚ますこと無い自分をただジッと見下ろし続ける。

魂を集めるなどと言う馬鹿馬鹿しい話を信じて死神に手を貸す自分は、本当はもう死んでしまっているのではないだろうか。良いように利用されているのでは

ないだろうか。そんな疑問が脳裏を過ぎる。

不意に、病室内に甘い香りが満ちた。

振り返ると、名前も知らないオレンジ色の花束を抱えたななこが病室に入ってきていた。

「マコト、元気？ー今日、大学でね、音域が広がったって誉められたんだよ」

ななこはベッドのオレに語りかけながら、花束を花瓶に移し替えていく。

「目が覚めたらきつと、マコトビックリしちゃうね？」

そう言つて笑うななこの目元に隈が出来ているのをオレは見逃さなかった。

「ああ、ゴメンね。今日は午後もレッスンなんだ。これ置いたら帰らなきゃいけないの」

左腕に着けた小さな腕時計をちらつと見て、ななこは花の包み紙を小さく畳んでゴミ箱に放り込んだ。

「また、明日来るからね」

そうにつこり笑つて。

ななこは扉の向こうに姿を消した。

パターンと、扉の閉まる音がやけに大きく聞こえた。

静かになる病室。

その中で、再び死神の声が頭の中に響き始めた。

『二人目は――――』

2 「工藤健太」

オレは公園のベンチに座っていた。

小さい頃、こんな公園で良く遊んだっけ。

見渡せば、随分と錆びて汚くなった滑り台やブランコで子供達が楽しそうに遊んでいる。子供の中にはオレのことが見える子もいるようで、不思議そうな顔をしてオレを見つめている。

「健太君って知ってるかな？」

トタトタとこちらにやってきた赤い服の女の子に声をかけると、ボーっとオレのことを見ながら右手でシーソーの方を指さした。

見れば一人でつまらなそうにシーソーに座った男の子がいた。

つまらなそうーとはちよつと違つかも知れない。彼は静かに空を見上げていた。

日差しは強く、青い空が目痛い。

風はとても穏やかに流れ、雲がゆつくりと形を変えていく。

オレはシーソーに近づき、彼の反対側に腰を下ろした。

死神に借りている力でオレはシーソーに自分の体重を預ける。
ギィイイイイーバタンツ

突然動いたシーソーに、健太君は一瞬だけ目を丸くして驚いていたが、すぐに対面にオレが座ったことを理解して、にっこり笑った。

「ねえねえ、おじさん遊んでくれるの？」

「ーお、おじさつ??」

いや、せめて死神って言われなかっただけ良しとしよう。

「えつと、健太君だよね？」

彼は不思議そうにコクリと頷いた。

「遊び相手いないのか？」

「うん」

「みんなの仲間に入れて貰わないの？」

「うん」

彼はそういうと、オレへの興味を無くしたのか、再び空を見上げた。
どこか寂しげで悲しげに見えるその顔。

オレはこんな幼い子供に「死の宣告」をしなければならぬ。
ならばせめてー

「遊んでやるよ」

オレの言葉に、彼は目を見開いた。

「ほんと!」

「ただし、おじさんじゃない。お兄さんだ」

「うん!」

彼は太陽にも負けないくらいの一杯の笑顔を浮かべた。

× × ×

それから、健太君とオレは滑り台をして、ジャングルジムで追いかけてつこをして、ブランコで靴を飛ばして遊んだ。

気が付けば空は茜色に染まり、陽はビルの向こうに沈もうとしていた。

子供達と一緒に遊びに来ていた母親や、仕事帰りに向かえに来た父親と共にゾロゾロと公園を後にする。

だけど健太君のお迎えは来ない。父親は既におらず、母親は出張中。預け先の祖母は足が悪く迎えになど来られるはずがなかった。

一通り遊具で遊んだオレ達は、再びシーソーの両端にそれぞれ腰を下ろす。
健太君はまたつまらなそうに空を見上げた。

「あ、一番星みつけ」

ふいに彼がポツリと呟いた。

「今日も、一番に見付けたよきつと」

「そーだな」

オレもつられて空を見上げた。

「僕ね、いつか一番星になるんだ」

「星に？」

「うん。空の上からならママをすぐに見付けられるし、一番最初に出てくる星ならママにもすぐ分かるでしょ？」

星になりたいーか。

純粹な子供の想いを聞いて、胸が締め付けられる。

オレはまだ健太君が理解できないであろう「死の宣告」をしなければならぬ。

「あー。もうじき君は星になれるよ」

「え、ほんと？」

「本当さ」

「どうしてわかるの？」

「ーそれは」

どう説明したものか。

一瞬の迷いが死神の力の制御を揺らめかせたためか、シーソーにかかる体重がゼロになった。

ギイイイイーガタンツ

シーソーは急に健太君の方へ傾く。

そして当然そのまま停まった。

暫く何が起こったか分からない様子で、健太君は目をパチクリしていたが、突然、身を乗り出して叫んだ。

「すっごおおい！魔法みたいっ！お兄さんって魔法使い！？」

「そーーだな。『悪い魔法使い』かな」

「じゃあ、ホントにホントに星になれるの？お兄さんがしてくれるの？」

返答に詰まる。

オレが彼を星にするということは、オレが彼を殺すということを意味している。経緯はどうあれ魂ををいただくことに変わりはないが、それを認める覚悟はまだなかった。

「魔法のことは、詳しく話しちゃダメなんだ」

苦し紛れの言い訳に、健太君は目を輝かせる。

「ホントにホントなんだ！……ねえ、いつ？いつ星にしてくれるの？」

「そ、それは……七回、起きた頃に」

オレの言葉に、健太君は右手と左手の指を折り数を数えている。

「えっと、いーち、にーい、さーん」

「……もう、遅いから帰りな。お婆ちゃんが心配するぞ」

「うん。じゃあね、魔法使いのお兄さん」

トテトテとこちらを何度も振り返りながら健太君は公園を後にした。

オレは健太君が見えなくなるまでシーソーの上に浮いていた。

あの子はもうじき死んでしまう運命にある。

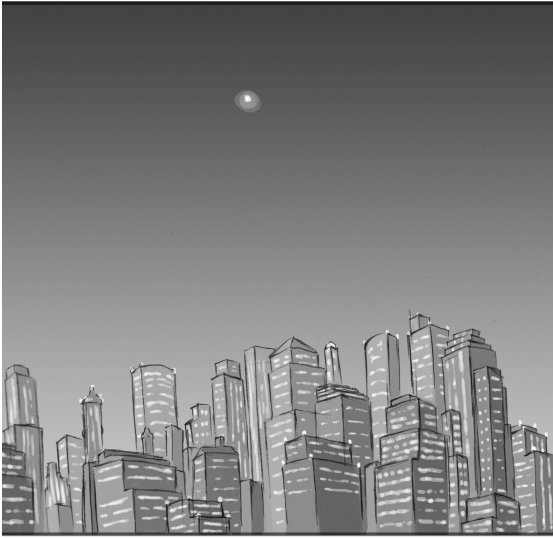
あんな子供が、片手で数えられるほどの年月しか生きられないという事実。そしてそれにオレ自身が関わるということ。

オレはその「重大さ」に押しつぶされそうな気がした。

そうだ……ななこに会おう。

ななこに会えば、少しはこんな気分が軽くなるんじゃないだろうか。

目を瞑れば、ななこの居場所はすぐに分かる。これは死神の力のおかげだ。



オレはななこを確認すると、音もなく空へ舞い上がった。ビルの向こうに沈んだ夕陽。

見上げる空は紺色に染まり、地上の星達を際立たせる。

ヘッドライトの河の上を、オレは風のように飛んでいく。

暫くすると、前方に小さな酒屋が見えてきた。

年季の入ったその店の木の看板には「酒処 唄」と彫り込まれている。

扉をすり抜けて店内に入ると、右手奥にカウンター。左手には大型冷蔵庫と陳

列棚があった。

カウンターには一組のカップルが腰掛けて、グラスを傾けている。

「あ、これおいし〜」

「ホントだね」

そんな二人の会話を聞きながら、カウンターの中の初老の男性がニッコリと笑った。

「銘柄にこだわる必要はないですよ。安いものでも、美味しい物は美味しい。好みの味なんて人それぞれに違うんですから、自分の好きな一本を探せば良いんです」

背筋がピンと伸びたマスターは、後ろの棚から、ボトルを一本取り出した。

「究極は、安いものを美味しく飲む。これは一般的なスーパードで安く売られている

品ですけど、一工夫すると、風味が豊かになるんですよ。ちよつと飲み比べてみて下さい」

マスターはそう言つて、新しいグラスに開けたばかりのワインを注ぎ、もう一つのグラスに、奥から取り出してきた木の器に入れられたワインを注いだ。

「あれ、これ色が違いますね」

「香りも豊かだ」

「どちらも元は同じ銘柄のワインですよ」

そんなやりとりを聞きながら、オレは店の奥へと足を進めた。

薄暗い倉庫。

そこに、店の前掛けをして、在庫の整理をしながら鼻歌を歌っているななこの姿があつた。

半地下の石を積み上げて作られた倉庫は、元々ワインの貯蔵用に作られたものらしく、程良く湿った空気は喉の負担になりにくそうだった。

石造りの特殊な構造の空間に、時折口ずさむ歌声が絶妙に反響している。

「キラキラと 煌めく波が

ふんふん

ほら 鮮やかに彩つて」

伸びやかで艶のある声。それが少しばかり、店内にも漏れているだろう。重い酒樽を転がしながら、ななこはとても楽しそうな声で歌っていた。

「えっとー脚立脚立っ」と

酒のストックが納められた棚の列に、ななこは脚立を持つてきた。

足下に置いてあったワイン六本入りの木箱を抱え上げると、脚立をトントンと上がって、同じ木箱が置いてある最上段へと手を伸ばす。

「よっ、っしょーあっ!？」

危ないっ。

突然、バランスを崩して脚立から転げ落ちそうになるななこに、オレは駆け寄らずにはいられなかった。

伸ばした右腕にななこの温もりと重みを感じて。

開いた左腕で、落ちてくるワインの木箱をそっと受け止めて。

「ーえ、なーに？」

ななこは不思議そうにオレの方を見つめた。

普通の人間に死神のチカラを借り受けたオレの姿が見えるはずがない。

なのに。

なのに、ななこの視線は真っ直ぐにオレの目を見つめているような気がする。

今すぐ、ギョツと抱きしめたい。

『ーやめておけ』

不意に聞こえた声に、オレは辺りに視線を向けた。

倉庫の奥、ライトの当たらない棚の影にアイツは居た。

『今のお前は、いわば半分死んでいる状態。不必要に関われば、周りの人間に死を振りまく事になるぞ』

「死神が何を言うんだ？お前の存在自体が死を振りまく存在だろ？」

『死を振りまくーか。クツクツク、それもいい。だが、くれぐれも気を付けろ。お前は魂を集め終わるまでは普通の人間の生活は出来ぬのだからな』

言い終わるか終わらないか。

死神の気配は消えてしまった。

「ちよっと疲れが溜まつてるのかな」

そう言つて、ななこは、眉間に手を当てて暫ししゃがんでいたが、ふうつと短く息を吐き、再び倉庫の整理を始めた。

「よいしょっ」

持ち上げられたワインの木箱にそつと手を伸ばして、オレはななこの手助けをしてあげる。

今は、こんな事しかしてやれないけど、肉体に戻つたらもつともつとななこを支えてあげたいんだ。

そのためには「……はやく魂を集めなければならぬ。」

「……それから一週間が過ぎた。」

昨日から降り続ける雨のせいか、オレの心はドンヨリと重い。これから健太君の魂を貰いに行かなければならないからだ。

向かった場所は、あの公園。

オレは公園の入り口のフェンスに寄り掛かり、その時を待った。肉体の無いオレにも雨の冷たさが伝わってくる。

こんな日に、その時を迎えるなんて。……いや、余計なことは考えないようにしよう。でなければ、きつとオレはこの先魂を集め続けることが出来なくなる。どのくらい時間が経つただろうか。

青い傘をさし、青い長靴を履いた健太君の姿が見えた。

「魔法使いのお兄さん……!!!」

水たまりをびよんと飛び越えて駆け足でこちらに向かつてくる。

だが、オレは彼の姿を見続けられなかった。体の中で、時が正確に刻まれる。それは彼の死の時へのカウントダウンに他ならない。

なのに、星になれると信じて、あんなに幸せそうな顔をしている健太君の姿などどうして見ていられるだろう。

「一五、四、三、二、一。時間だ」

キキキキキイイイイイイイイイ

何かを擦りつける大きな音が頭蓋骨の中に響く。

そして段ボール箱を潰すようなボコツという音がやけにハッキリと聞こえた。

視線を向ける。

青い長靴が、転がっていた。

そこから赤い痕が続いていた。

痕を辿るとフロントを潰した高級外車が停まっただけで、上からフワリと青い傘が舞い降りてきた。

「一っ」

声が出なかった。

身体が震えた。

あまりにもあつけなく、痛ましい最期にオレは立ち尽くすことしかできなかつた。

「ちよつと、大丈夫!？」

聞き慣れた声に身体が硬直が解けた。

白いスカートに白いニットを着たななこが通りがかったのだ。

「運転手さん、救急車を――一九、一九番よ!」

言いながら、彼女は倒れた健太君に駆け寄った。

「ボク、大丈夫だからね。すぐにお医者さんに連れて行ってあげるから」

抱き起こしながら、ななこは力強く健太君を励ました。

「――もう、死んでるよ、その子」

集まってきた野次馬の中からそんな声が聞こえた。その出血量を見れば、医療の知識を持たない人でも「もうダメだ」ということを無意識に思ってしまう。

健太君の最期の時を知っているオレならなおのことだ。だけど、ななこは言った。

「あなた、お医者さんなの!?!――違うんだったら、勝手に判断しないでっ!!」
ななこの声に、みな黙り込んだ。だけど、誰もななこに手を貸そうとはしなかつた。

「大丈夫、大丈夫だからねーマコトっ」

健太君を抱きかかえたななこが、確かにオレの名を呼んだ。

そして、オレの中に彼女のイメージが流れ込んでくる。

「ータ方の新宿。交差点。ドキドキワクワクした柔らかい気持ち。目の前に見えた最愛の人。」

「ー 駆け出す。赤信号を駆け出す彼。その姿は、ヘッドライトに飲み込まれて消えてしまった。」

「ー 病院。意識の戻らない最愛の人。名前を呼んでも反応しない。だけど、名前を呼び続ける。マコトーマコトーマコトーマコトー。」

「大丈夫。だから目を開けてよーマコト」

ななこの頬を伝い落ちる雨。

勢いを増した雨が、健太君の身体から体温を一気に奪っていく。

ななこの白い服に染み込んだ真っ赤な血が雨に滲み、広く広く広がっていく。

「ーん」

ピクリと、ななこの腕の中で健太君の身体が震えた。いつの間にか凄惨な数になった群衆がざわめく。

「ーぼく、星にーになれるんだよね？」

焦点の合わない瞳がななこを「いや、ななこの後ろに立つオレを見据えていた。

「うん、きつと素敵な星になれるわ。だから頑張つて！」

ななこが健太君を励ます。

健太君は力無く笑つて、

「よかつたー」

と、一言だけ吐き出すと、ななこの腕の中でグッタリと動かなくなつた。

「きゅ、救急車っ、救急車はまだなの!？」

ななこのあげた声は激しくアスファルトを叩きつける雨に掻き消されることなく、辺りに響き渡つた。

「……救急車が到着したのは、それから三分後のことだつた。

医師の見解によれば健太君は即死した。

死神に教えられた健太君の最期の時を考えれば、車に撥ねられた瞬間に健太君は命を失つたということになる。

だが、アレは一体どういうことだろう。
健太君は確かにななこの声に反応を示した。

そして、オレを見つめながら「星になれるか」って訊いたんだ。

「アレは一体……」。

アレが奇跡というものなのだろうか。

いや、今はそんなことを考えている場合じゃない。

ななこはあの後、オレが入院している病院に通院することになった。

疲労と睡眠不足に加え、あの冷たい雨に打たれたことで、風邪をこじらせてしまったようだ。

高熱で意識が朦朧としているのだろう。足元がふらつき、壁で身体を支えながら歩いている姿は見えない。

看護師に入院するよう勧められながらも、ななこは「点滴だけで」と告げて、通院すること早五日。

病状は一向に良くならない。

そういえば、近々大学で発表会があるなんてことを聞いた覚えがある。

だから、今は休めないのだろうか。

しかし、今しつかり直さなければ……。

少しでも、彼女を楽にしてあげなければ。
病室でベッドに横になり、点滴を受けている彼女の横で、オレは彼女の額に手を当てる。

「ーうん、なんかスツキリしてきたかも」

意識して冷たくした掌で、ななこの熱を冷ましていく。

今は、こんな事しかしてやれないけど。

だけど、オレが影から支えてあげるから、頑張れよ。

3 「野島泰徳」

三人目は、有名企業に勤める五十二歳の男だった。

「野島泰徳（のじまやすのり）」。四年制大学を卒業してからこの仕事一筋で生きてきて、人事部長を務めるに至った。部署と役職に見合った黒いスーツを颯と着こなす彼からは、同年代のサラリーマンにありがちな「くたびれたお父さん」というイメージは一切感じられない。

だが、彼は二週間後に「死ぬ」。

オレは彼にそのことを告げるため、会社の屋上へやって来た。

丁度昼休み。

バレーボールに興じる若い社員達の歓声が上がる中、フェンスに寄り掛かり、煙草を煙らす彼の姿があった。

ふううつと吐き出した煙が高い空へと上っていくのを目で追いながら、彼は口を開いた。

「そこで何をしているのかな？」

彼の問いかけは真っ直ぐにオレに向けられていた。

「――気付かれましたか」

オレは腰掛けていたフェンスからフワリと飛び降り、彼の隣でフェンスに身体を預ける。

「ここは部外者は立入禁止――部外者……なのか？」

眼鏡の位置を直しながら、彼はオレのことをジッと見つめた。

恐怖を感じているようでも、嫌悪を感じているようでもなく、ただオレに興味を持った彼の視線は、オレの足先から頭のとっぺんまでを何度も往復する。

「君は――何者だ？」

「何者だと思えます？」

「私は仕事柄、人を見る目はあるつもりだが――君の事はサツパリわからん。だが、血の通った人間には見えないな」

「野島さんの言うとおりですね。今――オレは人間ではありません」

彼はその厳格そうな表情を崩して笑った。

「はっはっはっは、じゃあ何か。幽霊か何かか？」

「幽霊――まあ似たようなモノですね」

「幽霊が終身保険の勧誘に来たわけでもあるまい。どうして俺の前に現れた？」
オレは彼にそれを伝える覚悟は出来ていた。少しでも早く目覚めて、ななこの

フォローをするためには、非情にならないのだから。

「ーあなた、二週間後に死にますよ」

バレーボールに興じる社員の歓声がやけに大きく聞こえた。

彼は、一瞬だけ眼を大きく見開いたが、何か心当たりでもあったのか。

「そうか。ーうん」

と少し悲しそうな顔をして頷いた。

「では、二週間後に迎えに上がります。それまでに、やり残したことが有れば済ませておくことをお勧めします」

柔らかい風がオレ達の間を吹き抜けていった。

ポンポンと、バレーボールが転がってくる。

「部長お、ボール取って下さーい」

女性社員がこちらに向かって手を振っている。当然、オレのことは見えていない。

「あ、ああ」

ボールをぼーんと放り投げて、野島さんは溜息をついた。

「二週間ーか。コレばかりはどうしようもないか」

「ー何か？」

「いや、こちらのことだ。気にしないでくれ」

「そうーですか。ではこれで」

オレは青空に浮かび上がって、その場を後にした。

x x x

病院で自分を見つめる。

二人分の魂が集まったためだろうか。心なしか頬に赤みが差しているように見える。

「赤みが差しているか。ーははつ、元々死んでるわけでもないのにさ」

だけど、自分のしていることが本当に意味のあることだって、実感が湧いてきた。このまま行けば、オレは肉体を取り戻せる。

さて、ななこに会いに行こう。

この時間はいつも「酒処 唄」でバイトだ。

オレは窓から空へと向かって舞い上がる。

夕陽を背中に浴びながら、オレは店を目指す。

灰色のビルの隙間に埋もれるように暖かな小さな看板が見えてくる。オレはその店の扉を擦り抜けて、中へとお邪魔した。

暖かい明かりが灯った店内。カウンターにはいつものように笑顔を浮かべたマスターがいて、会社帰りのサラリーマン達の相手をしていた。

「お気に召しましたら、販売も行っておりますので」

「ああ、いいねえ。家内に買ってつてやるかな」

「ねえ、マスター。今日は歌が聞こえてこないけど、どうしたの？」

常連の客だろうか。カウンターに身体を預けながらスーツ姿の女性が尋ねた。

「ああ、ななこちゃん、今日は休みなんですよ」

「ええ、残念だなあ。私、ななちゃんの歌聞きに来たのに」

「まあ、そういわずに。――新しい清酒入ったんですけど、試してみませんか？」

「そうね、一杯お願い。――ねえ、ななちゃんが休むなんて珍しいけど、どうしたの？」

グラスにトクトクと酒が注がれていくのを見つめながら、女性客が尋ねると、マスターは頭を搔いて、申し訳なさそうに言った。

「疲れが溜まってたらしくてね。風邪をこじらせちゃったんだって。今日は一日病院で点滴して来るって言ってたよ」

「ちよつと、マスター。あんまりななちゃんに無理させちゃダメよ？」
「どうやら、ななこはここでもファンを作ったらしい。」

オレは、結局、地元でもまともにファンを作っていない。下手な演奏を繰り返して、そこから逃げるように東京に出て、事故にあつて。

ただナナコの負担を増やしているだけだ。

ななこが心配だ。

オレは踵を返すと、店を後にした。

× × ×

ななこは病院のベッドに横になり、三種類の点滴を受けていた。

虚ろな目で天井を見上げたななこは、時折苦しそうに咳をしている。

「こんな所で立ち止まってちゃダメ、立ち止まってる暇なんて無い」

何度も、何度も。

彼女はうわごとのようにそう繰り返していた。

「ーっ」

ダメだ、見てられない。

こんな苦しんでるななこを見てられない。

でも、オレに今出来ることはないんだ。

せめて、少しでもリラックスできるように。そして意識がハッキリしたときに安らぎを。

枕元にラベンダーを詰めたポーチを置き、病室の花瓶に小さな向日葵を七輪生けて。オレは静かに病室を後にした。

× × ×

二人の魂を貫つて、ななこのことを考え続けて。

オレは人の気持ちを考えるようになったのだろうか。

三人目の「野島泰徳」が別れ際に見せた表情が気になり始めたオレは、彼のオフィスへと向かった。

彼は、部下から提出された書類に目を通して最中だった。

「こんにちは」

「ーまだ二日しか経っていないぞ？予定が変わったなら連絡をしてくれ」

「いえ、少し気になったもので。ー野島さん、あなたの予定を調べさせて貰いました」

彼は少し顔をしかめたが、ヤレヤレといった感じで休憩室を指さした。

応接室かと思えるようなソファーが置かれた休憩室に入ると、彼はソファーにゆったりと腰を下ろし、話し始めた。

「一ヶ月後に娘が結婚するんだ。できればそれを見届けてから逝きたかったんだが、そういうわけにもいかないだろう？」

彼は背広の内ポケットから黒い手帳を取り出して、中から一枚の写真を取り出した。

「これが、娘の彩乃だ」

写真には白い大きな帽子を押さえてニッコリと笑う女性が写っていた。どことなくGROOVEの美咲さんに似た雰囲気のお嬢さんだった。

「見ての通り、仕事一辺倒に生きてきた。ー彩乃には父親らしいこと一つもしてやれず、今度はあの子の幸せを目前にして、死を突きつけなければならぬ。それが心残りだね」

淋しそうな、でも、暖かな眼で彼は写真を見つめた。

「何か、メッセージでも残してあげたらいかでしようか？」

「どう言葉にして良いか解らないよ。ーハハッ、いくら仕事が出来ても娘と話すのが苦手じゃ、部下に偉そうなこと言えないな」

彼はそう笑いながら、写真をしまい、代わりに取り出した煙草のケースをトンと振って、一本取り出した。

「煙草ー結局辞められなかったな」

ぼうっと、ライターの炎を見つめて、彼は煙草を燻らせる。

紫がかつた煙が天井に広がっていく。

「後、十日あまりで私に出来る事なんて、たかが知れてるな」

ふううと肺に溜まった煙を吐き出すように、彼の不安や未練も吐き出されてしまえばいいのに。

オレはそんなことを考え始めた。

調べによれば、奥さんが亡くなった十年前から、娘の彩乃さんとはほとんど会話をしてこなかったという。彩乃さんがアメリカに留学してから三年あまりは顔を合わすことすら出来なかった。娘さんからの手紙は度々あったようで、その一つに「結婚」の件が書かれていたのだが、それに返事を出す時間すらとらず、仕事に没頭していたわけだ。

彼はそういう意味で「良い父親」とは言えないかも知れない。だけど娘さんが度々手紙を送ってきたという事を考えれば、彼は娘に頼りにされていると言えるのではないだろうか。

何もできなかった。

何もしてやれなかった。

彼がそう思ったとしても、娘には「頼りになる父親」だったはずだ。

――何もできない。

――何もしてやれない。

どこことなく、今のオレに似ている気がして、放っておけなかった。

オレが彼の――野島泰徳の「心残り」を摘み取ってやる。

問題は野島泰徳の一人娘、彩乃に「父の死」を伝えねばならないこと。

彼がそれを良しとするかどうか、普通なら聞かなければならないのだと思う。

それは個人の意思を尊重する「死神」としての義務だ。

一方で「死神」は「未練を断ち切る」という行動をしなければならぬ。これが最重要である。未練に決着を付けるための猶予期間――死の宣告することで、

それをサポートしているわけだ。

彼の未練は「娘に何もしてやれなかった」という事。娘の結婚を祝ってやることすらできずにこの世を去らなければならぬ、というその事実を少し曲げてやれば未練を断ち切れるはずなんだ。

結婚式の日取りの関係で、彩乃さんはこの日、日本に帰国する。

オレは国際空港で彩乃さんが到着するのを待っていた。

こっそり彼女と接触し、野島さんに彼女の「幸せ」の証であるウエディングドレス姿を見せることで、彼の未練は薄れ死を受け入れることが出来るはず。

計画に無理矢理なところがあるが、時間が無いのだから仕方がない。

壁一面のガラスの向こうにひっきりなしに離着陸する飛行機が見えている。

ああ、空が青いな。

こんな日はあの丘の木の下で、のんびりとななこと二人寄り添って歌を歌っていたんだよな。

それがもう随分と昔のことのように思える。

あれから一年。

たった一年がこんなに長く感じる。

色んな事が有りすぎた。

別れと挫折。

そして運命に振り回される日々。

「ーははっ、運命だつて。オレには無縁のモノだと思つていたよ、そんな言葉。だけど、そうだな。」

運命があるならば、今オレが魂を集めているのは神に与えられた試練なんだろう。

これ乗り越えて、目を覚ましたときに、オレの周りはずいぶん変わっていくに違いない。

早く、ななこにこの想いを伝えたい。そして二人のメロディーを奏でて行くんだ。

× × ×

掲示板がカタカタと音を立てて、NAL三〇七便の到着順が一番上に表示された。窓の外には滑走路に向かって進入してくる白い機体が見えてくる。

あれに彼女が乗っているんだ。

機体はゆっくりと高度を低くし、僅かに左右に振れた。

「ねえねえ、タイヤが無いのに走れるの？」

さつきまで窓に張り付いて行き交う飛行機を見つめていた子供が、隣に立っていた父親に尋ねた。

タイヤ？

NAL三〇七便に視線を向ける。

確かにギヤダウンしていない。

おいおい、何やってるんだよパイロット。

「ねえ、煙出てない？」

ロビーのソファアに座っていた女性が口を開いた瞬間、窓の向こうが光った。

ガラスがビリビリと振動して、ドオオオオンという爆発音が響く。

目の前で起きた光景に、オレは乾いた笑い声しかでなかつた。

左翼の二番エンジンから火を噴いた飛行機はそのまま、文字通り滑るように滑走路へ接触した。

胴体と路面との境から火花を散らしながら、飛行機は滑走路を滑っていく。

ロビーは騒然とした。

煙を上げる飛行機に消防車が数台近づいて放水を始め、スライダーからは次々

と乗客が滑り降りてくる。

オレはスライダーに近づいた。

彼女は？

彩乃さんは無事なのか？

煙と炎と悲鳴が渦巻く滑走路に、まだ彼女の姿はない。

機内へ身を滑り込ませる。

黒い煙が天井に溜まり始めた機内で、客室乗務員が乗客の誘導に奔走している。

泣き叫ぶ赤ん坊の音が、状況を現実のものとして認識させる。

どこだ？

どこにいる？

座席番号が見えない。

彩乃さんの姿が見えない。

その時、煙の向こうから子供の泣き声が近づいてきた。

「この子を早く外へ！」

振り返ると煙をまとわりつかせた女性が幼児を抱きかかえて走ってきた。

彼女の額から滴り落ちる真つ赤な血。

直感的に彼女が彩乃さんだと理解したオレは背筋が凍える思いがした。

死神がオレに言った言葉が頭の中をグルグルと回る。

「『不必要に関われば、周りの人間に死を振りまく事になるぞ』

オレが余計なことを考えたせいで、彩乃さんはここで死ぬのか？

野島泰徳の為にと思つてとつた行動が、その人の大事なモノを奪うことになつてしまふのか？

そんな、そんなこと！

「お客様、お客様も早く外へ！」

「もう一人、奥で泣いてる子が居るのよっ」

「お客様、おやめ下さい！早く避難なさつて下さい！」

「大丈夫。――私、この後大事な約束があるの。それを破るようなことはしないわ」

駆け出す彩乃さんを、乗務員が羽交い締めにした。

「離してよっ」

「出来ません。私達はおお客様の安全を――」

「あの子だつて立派な客よ！？」

だめだ、放つておいちゃダメだ！

オレは煙の向こうへ走つた。

息苦しい気がする。

だけど、オレには肉体がない。だから大丈夫。

子供を捜して、オレは子供を捜して機内を飛び回る。

煙の向こうで僅かに影が揺らめいた。

手を伸ばす。

握った感触は柔らかかった。

引き寄せる。

――熊のぬいぐるみだった。

乗客じゃなかった。

じゃあ何処にいる？

辺りを見回すオレの耳に小さく「助けて」と聞こえた。

ぬいぐるみの脚を小さな小さな手が握りしめていた。

「助けて、お兄さん」

黒い煙の向こうで、その声の主の瞳がキラキラと光っていた。純粹に生きよう

とするその眼差し、その力に、オレの中で何かが弾ける。

「今、助けてあげる」

そう言ったオレの身体から閃光が走って機内を駆け抜けた。

だが、爆発はしなかった。

燃えさかる炎は急激に火力を弱めて鎮火し、機内に充満していた煙は光が消えるのと同時に辺りから消え去ってしまった。

オレは、急激に襲ってきた疲労感にその場に膝を落とす。

『クッククック、馬鹿な男だ。魂の補修が出来ようと、魂を維持する力を無くしてしまえば意味がない』

死神の声が聞こえた。

『いいか、良く聞け。貴様が行使できる死神の力は大したモノではない。それ以上の力を望めば、貴様の魂を削ることになるー』

少し寂しそうなその声を背中であげながら、オレは子供の手を引いてスライダーへと向かった。

火と煙が消えていく機内に安堵の声が漏れている。

その向こうで、彩乃さんがこちらを心配そうに見ていた。

「ほら、もう一人で歩けるだろ？」

オレは子供の背中をとんと押してやる。

「ナオちゃん？ナオちゃん！！」

外から子供を呼ぶ女性の声。

「ママママ？ママあ！！」

元氣そうに子供が駆けだした。

待ち受けていた客室乗務員に手伝って貰いながらスライダーを滑り落ち、待ち受けていた母親にギュッと抱きしめられた。

「いやかった」

そう言った彩乃さんは、緊張の糸が切れたのか、その場に倒れ込んだ。

× × ×

病院の一室に、野島泰徳の姿があった。

彼の見つめる先には頭に包帯を巻かれて横になる愛娘、彩乃さんの姿があった。オレは、彼女を危険な目に遭わせてしまったのは自分のせいだと言うことが出来なかった。

申し訳なくて、情けなくて。

ただ、黙ってその親子を見つめていることしかできなかった。

「……ん」

彩乃さんの眉が動いた。

「あ、彩乃!？」

野島さんがその僅かな変化に気付いて身を乗り出す。

「ううん」

身じろぎをしながら彩乃さんはゆっくりと目を開いた。

しばし、辺りを窺っていた彼女は、脇で今にも泣きそうな野島さんに気付いた。

「ーあれ、お父さん？」

悪戯を見つけた子供のようにばつの悪そうな顔で、彩乃さんは眼を逸らす。

野島さんはただ黙って、いつもと変わらぬ娘の行動に安心したようだった。

居心地の悪そうな彩乃さんは野島さんと視線を合わさないように器用にキョロ

キョロと、辺りを見回し、時計に目を留めてあることに気付いた。

「ね、ねえ、お父さん」

「ん？」

「会社どうしたの？」

時刻は二時半。業務中のはずである。

「あーああ、昼のニュースで事故のことを知ってた」

「抜け出してきたの？」

「抜け出してって人聞きが悪いな。ちゃんと有給取ってきたぞ？」

仕事一辺倒に生きてきた野島さん。そんな彼の急な要求を、会社は二つ返事で承認したのだった。

「それより、たいしたことなくて良かった」

「うーん、来てくれてありがとうね」

「んーむ、娘の一大事だから、な」

彩乃さんは少し俯いて恥ずかしそうに。野島さんもどこかソワソワして、視線を窓の外へと向けた。

初夏のキラキラした日差しが差し込む窓の外。高い空がどこまでも続いている。雲はゆっくりと流れ、先程の事故が現実のモノだということを暈かすように、ゆったりとした時間が過ぎていく。

こんな心地の良い季節の中で野島泰徳はその生涯を終えるなんて、信じられない。

だけど、オレには解ってしまふ。

数日後に命を失うことが運命なのだ。

今まで、娘のために働き続け、娘との接点を失ってしまった父親と、そんな父親をずっと慕ってきた娘がやっと互いに言葉を交わせる日が来たというのに、そ

れが僅かな時間しかないなんて、悲しすぎやしないだろうか。

「ねえ、お父さん？」

「ん？」

「退院っていつ頃なのかな？」

「明日の朝の検査に問題なければ。当然、結婚式には――間に合うぞ？」

「そうじゃなくて――その前に、お父さんに付き合っただけのところがあつて

よ」

彩乃さんはそう言つて、少し恥ずかしそうに微笑んだ。

× × ×

翌日、無事に退院した彩乃さんは野島さんを連れて、とあるビルへと入つていった。受付で何やら言葉を交わした彩乃さんは、大きく弧を描く階段を駆け上がつて二階の踊り場で野島さんを振り返る。

「お父さ〜ん、早く早く〜」

まるで遊園地ではしゃぐ子供のような彩乃さん。頭に匂帯を巻いているとは思

えない元気な様子に、野島さんは苦笑する。

野島さんは上から手を振る彩乃さん感慨深げに見上げながら、ゆっくりと階段を上っていく。そして、目を見開いた。

二階に広がっていたのは夢のような世界だった。

一面が白く染まっていた。

美しく、そして清楚なウエディングドレスが並んでいて、野島さんの口から

「ああ」と溜息が零れた。

「えへへ、お父さんに選んで欲しかったんだ」

彩乃さんはそう言って野島さんの右手を引いてフロアを移動していく。

「ねえ、どれがいいかな？ こういう色のも似合わなくはないよねえ？」

薄い桃色のドレスに手を這わせながら、彩乃さんが尋ねる。だが、野島さんはぼうつと無言で立ち尽くしていた。どことなく目が潤んでいるように見える。

「でも、やっぱり純白かなあ」

振り返った彩乃さんから眼を逸らし、

「あ、ああー スマン、ちよっと待っていてくれ」

野島さんは慌てた様子で階段下のトイレへと駆け込んでいった。

野島さんがトイレに入るのを目で追っていた彩乃さんが、ポツリと呟く。

「それで、あなた何者？」

ドキリと。

オレの身体は硬直した。

「確か、飛行機の中にも居たわよね」

包帯をさすりながら彩乃さんが近づいてくる。

「それとも、頭を打ったせいで幻覚を見ているのかしら？」

オレの目の前に立ち、オレを真っ直ぐに見つめる彼女の目。ななこの目と同じようにキラキラした輝きを放っている。

「あそこに鏡があるでしょ？あれに映っていないのはどういうこと？」

彼女にはオレの姿が見えているらしい。

声に怒気は含まれていない。

だが、彼女への後ろめたさがオレを責め立てる。

「お、オレは――」

「待って――当ててあげる」

彩乃さんは顎に手を当て少し考える素振りを見せた後、につこり笑って言った。

「あの事故から私を救ってくれた天使ね？」

「ち、違っ――」

「そっか、ケガ心配して付いてきてくれたんだ」

彼女は天使のような笑顔をオレに向けた。

幸せ一杯のその笑顔を、オレはグチャグチャにしななければならない。

苦しくて辛くて。

でもオレの苦しみよりも大きなダメージを彼女は負うことになるのだろう。オレは意を決して言った。

「オレは天使なんかじゃない。――死神だ」

彼女が息を飲む音だけが聞こえた。

「――な、何言ってるの？」

「野島彩乃――幸せを前にして、不幸を味わうことになる。だが、それも運命だ。受け入れて貰う」

出来るだけ感情を殺して。

一言一言を彼女に伝える。

結婚式を目前にして父親「野島泰徳」が亡くなることを。「原因」を問いつめる彼女に「肺ガン」と答えると、彼女は暫し呆然としていたが、やがて寂しそうな微笑みを浮かべた。

「――だから、煙草はやめてって言ったのに」

きつとオレは彼女の涙を止めることは出来ない。

「あなたが、チャンスをくれたのね」

え？

今、彼女は何て言った？

「あなたが来てくれたおかげで、私はお父さんとお話しすることが出来たのかも知れない。だって、いつもなら空港に迎えにも来ないし、たまに食事に誘っても『仕事仕事』の一点張りだったんだから——そんなお父さんが有給取ってまで私に付き合ってくれたんだよ？」

彼女は焔めいた目尻を軽く拭うと、とびっきりの笑顔を見せた。

「今日は、お父さんと私の最高の思い出作りをするわ。あなたも手伝ってよね」

「そ、それは」

「それくらいのケアもしてくれないの？——死神ってケチなのね」

彼女の明るさに呆然としながら、彼女の強さに助けられる思いがした。

「——良いだろう。最高の思い出作りに微力ながら力を貸そう」

「そして。」

「その日」が来た。

仕事中に急に倒れた野島さんを救急車が搬送していく。

手術室に運び込まれる野島さんを、彩乃さんとフィアンセが見送った。

「……どんな医師が執刀しようが、もう手遅れだ。」

オレの声が聞こえたのかは解らない。だが、担当した医師はレントゲン写真を
見て力無く手を下ろした。

肺は本来の機能を失っていた。

もはやどうやって呼吸をしていたのか解らないほどに癌が進行していた。

医師の説明に、彩乃さんは声を殺して泣いた。

娘に不自由させないために、仕事に情熱を注いだ野島泰徳。

仕事にかける精神力だけが彼の身体を動かしていたのかもしれない。

「差し出がましいようですが、楽にさせてあげては……？」

医師に持ちかけられた話に、彩乃さんはゆっくりと首を振った。

「少し……待って下さい」

そう言つて、彩乃さんとフィアンセはその場を足早に去っていった。

ー病院の一室。

静かに横になる野島泰徳。

体中にチューブをつけられたその姿は、オレ自身をダブらせる。オレも今、彼と同じ状態なわけだ。ただ運が良いのか悪いのか、死神にチャンスを貰えた。もう一度生きるチャンスを。

そして、そのために同じように命を失うモノからその魂というエネルギーを貰い受けなければならぬ。

いつのまにか、この消毒臭にも慣れた。身体がいつも感じている匂いだから当然かも知れない。

白い小さな部屋の中、彼は静かにその時を待つ。

廊下が少し騒がしくなった。そのざわめきはだんだん近づいてきて、ガチャリと病室のドアが開いた。

そこに彩乃さんが立っていた。

飾り気のなさ故に純白が引き立つウエディングドレスを着て彩乃さんが立っていた。

「お父さん？」

彩乃さんは笑顔で野島さんに近づいた。

「ほら、似合うかな？ーこれお父さんが選んでくれたドレスよ？」

彼の手をそつと握り、ドレスのスカートの生地に触れさせると、ピクリと野島さんの脛が動いたように見えた。

「私、いつでも幸せよ？」

野島さんの目尻から一筋、涙が零れ落ちた。

「ー今までありがとう、お父さん」

ー時間だ。

野島泰徳から浮き上がった輝く球体が辺りを照らす様子はとても幻想的だった。父親の優しさが詰まっていたのだろうか。とても暖かい光だった。

彼の心残りだったモノが果たして解消されたかどうか。

それは彼が最後に流した涙だけが知っているのだろうかー。



自己満足で小説（もどき）を書いていた私に、「恋愛物を書いてくれないか」との要望が来たのが二〇〇六年の早春でした。

いつも銃を撃ちまくるような話ばかり書いている私に「恋愛物」とは不思議な事もあるものです。

「死神とか出てきてもいい？」の問いかけにOKが出て、無理矢理自分のフィードルドに持ち込んで。別のサークルHPで不定期連載している【Trigger】（トリガ―）と、大学時代に課題で書いた脚本【声を聞かせて】を原型として、足したり引いたり掛けたり割ったり……。

第一稿は私の嗜好を反映してか【BAD END】の巻でした。

「人が死ぬって話自体、暗く重いのに、バッドエンドはどうよ？」と、あまり評判がよろしくなく、泣く泣くエンディングを変更。全編の決定稿が出来たのが二〇〇六年六月末でした。

それから一年あまり。やっと前編を本にすることが出来ました。

前後編に分けたのは、できることならドラマCDの進行と合わせて楽しんでもらいたかったからです。

後編もドラマCDと同時に出したいと考えています。が、収録予定の関係で、少し時間がかかってしまうかもしれません。

恋人に想いを伝えるため魂の修復を続ける主人公。

その結末が描かれる「約束の丘で 後編」をどうぞお楽しみに。

平成十九年八月十二日

D II 零式

奥付

発行日 二〇〇七年八月十七日

発行元 F—LOOP

発行者 D〓零式

f-loop-hp@mail.goo.ne.jp

<http://floop.yu-nagi.com/>

印刷 F—LOOPメンバーの手による



おまけ
約束の丘で 前編 (A6サイズ) 表紙

PDF化にあたり

「約束の丘で 前編」をダウンロードしていただきありがとうございます。

この作品はF—LOOPのホームページで公開していた小説を元にしています。同小説を製本したものは二〇〇七年にコミックマーケット72で販売させていただきました。奥付の【発行日】や【印刷】などの項目はその時のデータをそのまま載せています。

現在製本版の再版予定がないため、「前編」手を入れることができず、またweb上で公開していた作品ページが見辛いということもあり、まだ同小説を見たことのない方にはPDFデータでダウンロードしていただくことにいたしました。

PDF化するにあたって、一部修正しておりますが、楽しんでいただければ幸いです。

なお、後編小説はコミックマーケット76の開催に合わせて公開したいと考えています。

もうしばらくお待ち下さい。

平成二十一年二月二十日

D 〓 零式

F—L O O P

f-loop-hp@mail.goo.ne.jp

<http://floop.yu-nagi.com/>